説教「主をほめたたえよ」

ルツ記 4 章 1〜17 節

1999.8.1

日本バプテスト同盟 関東学院教会

8 月最初の主の日を迎えました。連日、うだるような暑さが続いており、これからも続くことですが、冷房の効いたこの礼拝堂に今朝も導かれ、主をほめたたえ、み言葉を聞く幸いを与えられ、主に感謝をささげます。ご出席の皆さんとご家族の上に主の豊かな恵みがあるよう、イエス・キリストの御名(みな)により祝福いたします。

前回において、ルツはナオミの配慮により、また命令により、麦打ち場で夜を明かしているボアズを訪ね、結婚を申し込みました。ボアズはルツのことに関心を持ち、理解し、また愛していたと言ってよい。

ルツはベツレヘムでは、姑(しゅうとめ)に支えて落穂拾いを続けている評判の嫁でありました。姑のナオミの家のためとはいえ、若いルツがこの中年の自分に求婚したことをボアズは心から歓迎し、必ずあなたを幸せにし、家を絶やさないようにしましょうと約束しました。ただ、そのとき、一つのクリヤーしなければならないことがあると言います。

それは、ボアズと同じように、家を絶やさないようにするもう一人の親戚がいることでした。そして、明日にもその人に会って、決着をつけましょうと話します。つまり、ナオミの家を絶やさぬようにする義務を負う人が別にいるから、彼がナオミ一家のすべての面倒をみようと言うなら、そうさせねばなりません。もし、その義務を負わないと言ったら、そのときはわたしが代わって責任を負いますということです。

そういう訳ですから、ボアズとルツの関係は、土壇場にきて緊張感が漂います。果たして、ボアズより先に責任を負う者がこの問題に対してどう出るか、ボアズとルツの運命や如何(いか)に、という緊張感を読者に与えているのであります。

そこで、4 章に入ります。この章には 2 つのクライマックスが出てきます。その一つは、今申しましたボアズよりも近い親戚の者がどう出るか、もう一つは、ルツ記全体のクライマックスとしてのナオミの喜びであります。

4 章の初め、ボアズは早速町の門に行きますと、丁度そこを通ろうとする例の親戚の男を見つけ、ここに座ってくださいと頼みます。それと同時に、町の長老 10 人にも同席してもらいました。イスラエルにとって、町の門は法廷の場として使われたのです。長老 10 人はベツレヘムの町を代表する人たちと言えます。

そこで早速、ボアズはその親戚の男に言います。モアブから引き上げてきたナオミは、貧困のため畑を手放そうとしています。ナオミのために畑を買い取ってほしい。あなたはその責任のある人で、わたしは次に責任があります。すると、その親戚の男は、ではわたしがその責任を果たしましょうと答えたのであります。

ここまで読んできた人にとって、ボアズでなくこの人がルツと結婚するかも！ とはらはらする話ですが、ボアズはその男の答えに対して、あなたがナオミの畑を買い取るときは、モアブからナオミと一緒に来たルツというモアブの婦人をも娶(めと)って、死んだナオミの夫の息子の家系を嗣(つ)ぐ子どもを育てなければなりませんと言います。

すると、その親戚の男は、いや、わたしはそこまで責任を負うことはできません。わたしは下りるから、あなたがその責任を果たしてもらいたい、と答えたのです。そこで、長老たちの証人の前で、その親戚の人は古くからの習わしに従って、自分の履物(はきもの)（サンダル）を脱いでボアズに渡したのです。

この儀式は、自分はその責任を果たしたくないので、その権利義務を次の親戚であるボアズに明け渡したことを意味したのです。そこで、ボアズは町の長老 10 人の前で宣言し（9～10 節)、これで問題の決着がつきました。

ボアズは正当な仕方で法的にルツと結婚し、ナオミ一族を再興する意思を表明し、承認されたのであります。続いて、門にいた長老たちは、ボアズとルツの結婚が神の祝福を得て多くの子どもに恵まれるようにと、祝いの言葉を述べ祝福しました。

「主が身ごもらせたので、ルツは男の子を産んだ」（4：13）とあります。主がルツを身ごもらせたとあるように、それはナオミのベツレヘムへの帰郷、ナオミの計らい、ルツの求婚、そしてボアズがもう一人の親戚の人と会って話をつけるというようにして、古くからのイスラエルの掟(おきて)に則(のっと)って、ボアズとルツの結婚がゴールインしたのでした。

その背後には、主が見えざる御手(みて)をもって不思議な仕方で導いてこられたこと、そのことが、この「主が身ごもらせたので、ルツは男の子を産んだ」という一語の中に込められていることが分かるのであります。

ルツ記は、ルツに男の子が誕生したことでクライマックスに達するのであります。しかも、男の子を出産したルツが前面に出ておらず、姑のナオミに注意が集中していることが不思議に感じられます。

一体、ルツ記という書物の主人公は誰なのか。ルツなのか、それとも姑のナオミなのか、どちらなのかという疑問さえ湧いてきます。その点に注意を払いながら、話を進めていきます。

14節、「女たちはナオミに言った」という言葉で始まっています。少し回りくどい言葉ですが、そこを原文に忠実に訳してみますと、14〜15節、「主はほむべきかな、今日、あなたを贖(あがな)う人がいないままにはしておかれなかった。その子はあなたの魂を生き返らせる者です。あなたを愛する嫁、しかもその人は7人の息子にも勝る素晴らしい人」と賞賛しております。

確かに、ルツはこのように、周りにいる婦人たちに認められ賞賛されています。ここで感じるのは、家族に子どもが与えられるということがどんなにか祝福であり、恵み溢(あふ)れることかということです。しかも、その喜びはナオミに向けられているのです。16節、ナオミはその乳飲み子を懐(ふところ)に抱き上げ、養い育てたおばあちゃんとなった。孫が与えられ、その孫を抱くことがいかに幸せなことであるかを思わされます。

17節、近所の婦人たちは、ナオミに子どもが生まれたと言った。ルツが産んだのに、なぜ、ナオミに子どもが生まれたと婦人たちは言ったのでしょうか。

一つの解釈は、この生まれた子を養子として、ナオミの子として迎えたという解釈があるようです。

これに近い例としては、ヨセフ物語というのがあります。ヨセフはエジプトに売られた後、エジプトの宰相(さいしょう)となりましたが、そのときエジプトの祭司の娘と結婚し、マナセとエフライムという2人の男の子を与えられた。後になって、父ヤコブが飢饉(ききん)のため、一族エジプトに引き上げてきました。

ヨセフが二人の子を父のもとに連れて行き、父の膝(ひざ)の上に乗せ、祝福してもらう場面がありますが、創世記48：5に、ヤコブが言うには「お前の二人の子をわたしの息子にしたい」と言って、祝福しています。

12部族の一つはヨセフ族。それがマナセとエフライム族としてヤコブの12部族に加えられた、そうした例があります。

しかし、ナオミがここでルツの産んだ男の子オベドを膝に抱き上げ孫としたのは、自分の子としたのではなく、単純にその子を愛し育てるという、ナオミにとって最高の喜び、幸せを表わしています。

では、なぜ婦人たちはナオミに子どもが生まれたと言ったのでしょうか。そこがルツ記のクライマックスたるゆえんだと言えます。ナオミはモアブの地に移り住んでから、夫エリメレクを失い、さらに10年余り後、二人の息子キルヨンとマフロンをも失ってしまいました。

1：21 でナオミは、ベツレヘムを「出て行くときは、満たされていたわたしを、主はうつろにして帰らせた」と言う。満たされていたとは、夫があり、二人の息子が共にいたということです。

ところが今、ベツレヘムに帰ったときには、空っぽになってしまったと、その悲しみと不運と孤独を率直に語ったのでした。ベツレヘムに帰ったばかりのときは、「主がわたしを悩ませ、全能者がわたしを不幸に落とされた。全能者がわたしをひどい目に遭わせた」（1：20b、21b）と言っておりました。

実際、そのように言うほか、言いようがなかったのであります。ところが、不思議にも、全く予想しなかったルツの存在によって、ルツの親孝行を通して真に不思議なことが起き、正当な法的手続きにより、ルツがボアズと結ばれ、一子が与えられました。

ナオミはモアブからベツレヘムに帰る途中、二人の嫁を説得して、実家に帰そうと努めました。その一番の理由は、自分にはもう子どもを産む望みはない、ということでした。ナオミに子どもを与えられる望みは失(う)せていました。

ところが、どうでしょう。今、ナオミに、自分の家を嗣ぐ男子が与えられたのです。子どもを与えられる望みの全くなかったナオミに、神はルツを通して、今や子どもをお与えになった。

その神の奇跡を、周りの女の人たちは、ナオミに子が生まれたという言葉で表わしたのであります。神のなせる業は奇(く)すしきかなであります。

作者不明の詩としてよく話されることですが、ある人が夢の中で自分の一生を振り返ったとき、自分の足跡のほかにもう一人の足跡がついているのを見た。ところが、生涯の中で最も辛(つら)い時を経験したとき、その足跡は一人の足跡しか残っていなかった。

そこで、彼は神様に言いました。なぜ、わたしが一番苦しいときにあなたはわたしを独りにしておかれたのですか、と質問した。すると、その答えは、その足跡はわたしのだ。そのとき、わたしがあなたを背負って歩いたのだ、と答えたという有名な詩であります。（参照 "Footprints"）

同じことがナオミの生涯にも言えるように思います。夫を失い、二人の愛する息子を失ったとき、たった一人で捨て置かれたと感じた（それを言葉で表現したのが 1：5）。まさにそんなとき、主はルツを通して働いておられた。

ルツの言わば隠れた奉仕によって、ナオミの喜びである、彼女の家に男子が与えられたことが前面に出る。まさしくそれは、主がなされたことでした。詩編 113 編 9 節が「子のない女を家に返し、子を持つ母の喜びを与えてくださる。ハレルヤ」と歌っているのは、ナオミの心境を表わしております。

ナオミの信仰の生涯を通して、わたしたちもまた、苦しく辛いとき、神様がわたしに対しわたしを

見捨てておられると思われるときこそ、主が全く意外な仕方で救いの御手を用意しておられるという信仰と希望に立ち返りたいものです。人生の中でしばしば隠れたところで働き給う主イエスの御手を仰いで、神をほめたたえて生きていきましょう。神はルツを通してやがて希望を与え、また、御子イエス・キリストをもわたしたちに与えてくれた主であります（参照 ルツ記 4：18〜22、マタイ1：5〜16)。